

No. 74 2015 年



日彫会報

公益社団法人
日本彫刻会

事務所 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-29-18 レジヨン・ド・諏訪202号室

TEL 03(3209)1861 FAX 03(3232)0557

<http://www.niccho.com/> email: webmaster@niccho.com

— 美の多様性と社会に果たす役割を求めて —



第 45 回日彫北陸展ワークショップ風景

第45回日本彫刻会展覧会を終えて

公益社団法人日本彫刻会理事長 山本眞輔

美術の故郷、上野の杜、東京都美術館に帰って四回目の「日彫展」が無事終了致しました。本年も日彫展ならではの行事、彫刻鑑賞教室、タッチツアーなどを各方面のご協力により実施いたしました。会員の皆さん、審査員ほかお力添えをいただきました関係各位に、厚く御礼申し上げます。

また今年は陳列方法を少し変えてみました。効果は如何だったでしょうか。感想やご意見などお聞かせいただければ幸いです。

日本彫刻会は昭和22年に日本彫刻家連盟として出発、紆余曲折を経て平成22年に公益社団法人日本彫刻会となり現在に至っています。日本におけるヨーロッパ具象彫刻の流れを受け止め確固たる足跡を残してきた先輩方の歴史をしっかりと受け止め、さらに進んでこれからの現代彫刻のあるべき姿を見据えていきたいという思いを新たにしています。

ともすると独りよがりになりがちな作家が、作品を持ち寄り発表することにその意義を見出しています。展覧会は個人の力の発表の場としての側面と、彫刻展を開催する事によってできる社会貢献の側面の2本柱を掲げ、確実にその成果を上げてまいりました。特に若い作家の輩出には目を瞞るものがあります。新しい視野、センス、技法、をもった人が確実に育っています。地に足を付け勉強しているのは頼もしい限りです。彫刻を生業として生活することは厳しく、「彫刻」は絶滅危惧種と揶揄する人もいますが、これからの日彫会は、いい仕事、いい展覧会をすることによって世間の評価を変えて行かなければならない任務を背負っています。

沢山の人に展覧会を見ていただきました。いろいろなアドバイスなどもいただきました。それらを一人一人がしっかりと受け止め、これからの制作に生かしてまいります。「表現の多様性」という切り口で彫刻展を見ると、その可能性の大きさは計り知れませんが、まさに緒に就いたばかりということもできます。たくさんの行事も行いました。これからは現代社会における彫刻展の役割の変化に対応してまいります。

ご来場頂いたみなさんにお礼を申し上げると同時に、作家も現代に呼吸していることを自覚し前進したいと思えます。第45回展を一つの区切りとしてさらなる努力を約束し挨拶いたします。

第45回日本彫刻会展覧会

日本彫刻会は、平成22年11月から公益社団法人として新しい歩みをはじめました。彫刻のみの展覧会として独自性の発揮と公益に資するという大きな命題のもと、本年も上野の東京都美術館にて、第45回となる日彫展を開催いたしました。

日彫展では彫刻作品を展示した会場で彫刻研究会やギャラリートーク、彫刻に触れる鑑賞支援活動などを継続して行っています。会員は自己研鑽に努め、会としても公益性を持った社会貢献活動に尽力し、時代に見合った美術団体の形を模索しております。

第45回日彫展の詳細は以下の通りです。



会場風景 ギャラリーA

①会期 平成27年4月19日(日)

4月30日(木)

②会場 東京都美術館

ギャラリーA・B・C

(東京都台東区上野公園8-36)

③陳列点数

陳列点数 317点

内訳

正会員 237点

会友 37点

遺作 2点

無鑑査(一般応募) 3点

鑑査(一般応募) 38点

うち初入選 16点

④審査員

審査員長 山本眞輔

圓鏢元規 石黒光二 柏原花子

加茂為男 佐藤敬助 柴田良貴

田畑功 長岡強 山田朝彦

小関良太 梶川俊一郎 高野眞吾

土居忠雄 前芝武史

(以上15名)

西望賞審査員

市川政憲(美術評論家)

⑤会友推挙選考委員

山田朝彦 圓鏢元規 佐藤敬助

石黒光二 (以上4名)

⑥受賞者

西望賞 寺山三佳

日彫賞 武本大志 横山丈樹 村上佑介

優秀賞 岡本和弘 境野里香 重政信明

上松真弥 山本将之

新人賞 秋田美鈴 飯島聡恵 奥平陽和

中山邦彦 細川大潤

(西望賞審査講評、受賞作品の詳細等は5・6ページに掲載)

⑦会友推挙・正会員推挙

正会員推挙 澤口准子 西見智之 服部純

村上佑介 山本将之 (以上5名)

会友推挙 岩重圭子 上原清 加藤真浩

神山美登里 中山邦彦 平杉容子

細川大潤 御旅屋圭子 山口左知代 (以上9名)

⑧入場者数 8642名

内訳

一般 146名

学生 22名(小学生含む)

企画展協賛 168名

招待状 5669名

招待券 1048名

身体障がい者手帳をお持ちの方 100名

付添者 39名

70歳以上、子供 243名

日本美術家連盟他 70名

展覧会関係者 1137名

⑨彫刻研究会

日時 4月19日(日) 午後1時より

参加者 約150名

内容 受賞作品を中心とした作品講評、
受賞者及び若手作家と審査員による
対話形式での研究会
(詳細は7ページに掲載)

⑩作家が語る鑑賞会(ギャラリートーク)

日時 期間中毎日(4月19日、30日を除く)

午後2時より

参加者 通算約149名

内容 受賞作品を中心とした作品解説、
出品者による制作意図の解説や制作
に関わるエピソードトーク

⑪彫刻に触れる鑑賞支援活動

a. 視覚に障がいがある方のタッチツアー

希望者の申し込みにより随時実施

通算参加者3名

b. 盲学校鑑賞教室

4月23日(木)

東京都立葛飾盲学校

中学生5名 引率者4名

4月24日(金)

筑波大学附属視覚特別支援学校

高校生15名 引率者6名

4月28日(火)

東京都立久我山青光学園

小学生19名 中学生20名

引率者26名

(詳細は6ページに掲載)

⑫表彰式及びオープニングパーティー

日時 4月19日(日) 午後5時より

会場 東天紅上野店 3階 鳳凰

(東京都台東区上野池之端1-4-1)

⑬図録作成

平成27年4月19日(日) 発行900冊

⑭地方展

第45回日彫展の陳列作品より63点を選出し、
基本巡回作品としました。

地方展においても、ワークショップ等の様々
な企画を実施しております。詳しくはそれぞ
れの特集ページをご覧ください。

(1) 第45回日彫東海展

会期 平成27年5月5日(火)

5月10日(日)

会場 愛知県美術館8階ギャラリー

(愛知県名古屋市中東区東桜1-13-2)

愛知芸術文化センター
(詳細は8ページに掲載)

(2) 第45回日彫北陸展

会期 平成27年6月12日(金)

6月16日(火)

会場 石川県立美術館

(石川県金沢市出羽町2-1)

(詳細は9・10ページに掲載)



会場風景 ギャラリーC



会場風景 ギャラリーB

受賞作品

西望賞



寺山三佳
「dialogue」

西望賞の選考に臨んで

西望賞審査員 市川政憲 先生

(美術評論家)

かつてボードレールは、絵画と比べて彫刻のとらえがたさについて、いくつもの見方が成立してしまいうえの曖昧さを指摘しましたが、それは、彫刻がこの現実の空間に置かれるからであることは申すまでもありません。向こう側を断つことで、この現実の空間と一線を画した絵画に対して、三次元世界にある彫刻は、形式と

しては曖昧さを残すことは事実かと思えます。しかし、かの詩人のように彫刻をネガティブ、或は消極的に見るつもりはありません。私たち自身、この現実世界のどこかしらで、この大地に足裏で接しながら立っているわけであり、その限界を知るがゆえに向こう側を引き寄せんとするポジティブな志向が、彫刻の意志かと考えます。「形式」とは耕され続けた末に成立したものであり、彫刻は形式として不明瞭というよりは、形式性そのものを問うものなのかもしれません。空間もまた量として固定的にとらえられる時、過去の先端たる現実にはかなりません。その現実世界に抛りながら、そこに重なるように、一つの始まりとしての空間、すなわち「現在」が開かれることを、今こそ、彫刻に期待したく思います。

私が、寺山三佳さんの《dialogue》を西望賞に選んだのは、二つの像の間に、深い奥行きを感じたからです。「深い」と言っても溝ではありません。二つの上半身のその間は隔たりではなく、近い距離でありながら深さであり、現実にある光景でありながら、二人の心理的な懸隔とは別種の「空間」に出会ったからであります。そう見えたのは、上半身しか作られていないからかと思えます。カウンターの部分はそぐわない感すらありますが、上半身にふさわしく作れば、よくある風景で終わるでしょう。破綻とも、足元の問題を濁したとも言えます。しかし、現実の空間に紛れてしまわないために、足元に意識的であったことを讃えたく思います。(市川政憲)

日彫賞



武本大志
「泥棒せぬは氏神ばかり」



横山丈樹
「rebirth VI」



村上佑介
「不自由な抱擁」

□ 優秀賞



山本将之
「立ち上がるために」



上松真弥
「空旅」



重政信明
「青の記憶」



境野里香
「おんぶ」



岡本和弘
「朝の使者」

□ 新人賞



細川大潤
「旅立ちの季節」



中山邦彦
「プリマ夢見る少女」



奥平陽和
「はるいろ」



飯島聡恵
「figure」



秋田美鈴
「芽生えの季」

◇ 日彫友の会の活動

盲学校鑑賞教室・タッチツアー

日彫会はこれまで「触れる彫刻鑑賞」を通して、視覚障がい者の鑑賞支援を行ってきました。今回の展覧会でも日彫友の会と鑑賞支援部が中心となり「盲学校鑑賞教室」と「タッチツアー」を行いました。

盲学校鑑賞教室では、葛飾盲学校、久我山青光学園、筑波大学附属視覚特別支援学校の児童・生徒を招き、引率者を含め95人の参加がありました。

鑑賞では、作品に触れるとともに、においを嗅いでみたり、素材の重さを感じてみたりと、様々な角度から鑑賞を楽しむ子どもたちの姿が印象的でした。「黒帯」と題する作品を鑑賞していた際の「かたく握りしめたこぶしに試合に臨む強い意志を感じた」という生徒の言葉には、触れる鑑賞の深さを改めて感じさせられました。鑑賞には経験等の差も表れるので、鑑賞支援者と引率教員が事前に話し合いを持ち、情報を共有できるとより個に応じた鑑賞支援ができるという話ができました。

参加生徒からは「気に入った彫刻は、頭を抱えて何かを考えているような男の人の彫刻です。なぜかという、なぜ頭を抱えているかを想像すると面白いからです。僕はこの彫刻を作った人が何を思いながら作ったのか知りたいです。」とのお手紙をいただきました。

◆彫刻研究会

彫刻研究会は、毎年楽しみにしているという一般の参加者もおられ、作家だけでなく多くの鑑賞者も交えて彫刻作品に興味と親しみをもっていたり、という大事な企画となっています。また、受賞作品についての審査員の講評と、作家の作品への思いや制作過程などが語られ、より深く鑑賞ができたり、参加した作家が制作の活力を得たり、切磋琢磨しあう場でもあります。

今年の研究会は4月19日（土）午後1時から、東京都美術館ギャラリーA・B・Cで行われました。当日の会場には一般の方も合わせて約200人の来場者があり、そのうちの多くの方が研究会に参加していました。



彫刻研究会の様子

はじめに、審査委員長の山本眞輔理事から、日彫会を牽引してこられた作家の作品を中央に置き、作品の横や後ろも見られるようにしたこと、西望賞以外の受賞作品をまとめて二階に集めて展示したことなど、会場設営の工夫が話されました。また、「彫刻は美しくなくてはいけな、作家はどのように美を表現したかをみなさんの目で確かめてほしい。」というお話がありました。

続いて、堀尾秀樹企画主任の司会で受賞者のお話、審査員の講評と進みました。西望賞受賞作品《dialogue》について「二人は何を話しているのか？どんな関係か？など見る人が物語を作っていくるように意図して制作した」という話が作者自身から語られました。新人賞受賞《プリマ夢見る少女》の作者からは、「70歳をすぎて再び中央の展覧会に出品した。これを機にまた頑張つて制作に励みたい。」という喜びの声がありました。参加者からは、「こういう研究会でいろんな話を聞き自分の疑問が納得させられる。作家としての心のおちどころを求めて毎年来ている」「若い作家も多く活躍されているんですね。」という声がかれました。研究会終了後に、受賞作品の前で作者を囲み質問したり答えたりする輪があちこちに見られました。

最後に、圓鋸元規委員長から「受賞者や審査員の話に私自身大変勉強になった。がんばりましょう。」というお話がありました。

昨年まで反省に出ていた、音響も改善され、作者や講評の話がよく聞き取れて大変意義深い研究会となりました。



盲学校鑑賞教室風景



触れる彫刻鑑賞の様子

第45回日彫東海展

会期 平成27年5月5日(火) ~ 5月10日(日)

会場 愛知県美術館8階ギャラリー

陳列点数 103点(内巡回作品63点)

入場者数 1966名

中日賞

「evolution」 澤口准子

東海テレビ賞

「背を向けて」 永江智尚

愛知県知事賞

「渴望」 加藤真浩

今回、展覧会会期がゴールデンウィーク中5月5日~10日(7日休館)の5日間でしたが、二千名に迫る多くの鑑賞者を迎えることができました。昨年同様に関東関西方面からの鑑賞者もあり、盛況に終了することができました。



指先で顔の表情を感じました

例年通り新聞紙上の報道により、触れてみる彫刻展として幅広く周知され、今年も12名の方々に(視覚障がい者・付添い・サポーター含む)タッチツアーに参加していただきました。鑑賞会も盛会となり、参加された視覚障がい者の方々から「手が喜んでいる」と言葉を頂くことができました。また、展覧会会期前(1ヶ月)にボランティアサークル代表者から事務局に電話があり、「触れてみる鑑賞会の前に写真(東海地方作家のタッチ可能な作品)をお借りして、言葉で説明をしてから、鑑賞会に参加したい」とのことでした。

参加者に終了後アンケートをお願いすることもでき、数々の心あたたまるご意見を頂きました。



作者と話しながらの鑑賞



触れてみる鑑賞会の様子

今後も可能な限り、障がいの有無に関係なく触覚によって鑑賞できる環境を一層提供し「心動かされる」精神的あるいは美的な体験に繋がる様、そしてこれからの社会を築きあげる子ども達の為にも貢献する活動が出来ればと…熱い気持ちで余韻残る閉幕でした。

(東海日彫会事務局)

第45回日彫北陸展

会期 平成27年6月12日(金)

～6月16日(火)

会場 石川県立美術館

陳列点数 84点(内巡回作品63点)

入場者数 1332名

北陸日彫会賞

「ashimoto」 東 誠

北國新聞社社長賞

「春陽」 小西徳泉

北陸日彫会では展覧会の鑑賞企画として「家族で作ろう。みんなの笑顔」をテーマに親子彫刻ワークショップを開いており、今回で4回目となります。当日は75名の参加を得て、大変な盛況でした。

子どもたちとの制作では、アルミの針金を芯棒にして軽量樹脂粘土で自分や家族の姿、動物や怪獣?などを自由に作ってもらいました。保護者の方には、スタイロホームを芯材にして子どもの笑顔を題材とした制作にチャレンジしてもらいました。悪戦苦闘されている方々もいましたが、日彫会員が制作を共にすることで、皆さんそれぞれの彫刻制作を楽しんでいただけたようです。作品は1時間程で全員仕上げ、その後は鑑賞とアンケートの記入をして頂きました。



活気あるワークショップの様子

以下、アンケート結果から見えて来たことをあげてみます。

Qこの教室を何でお知りになりましたか?

- ・ポスター、チラシなどを見て 2
- ・当日参加 1
- ・知人に誘われて 32
- ・日彫会会員に誘われて 13

知人の中には日彫会員も含まれているかもしれませんが、背中を押してもらえば参加してみたいという方々が多いであろうということが推察されます。

Q参加の動機は何ですか?

- ・工作や粘土細工が好き(得意)だから 20
- ・彫刻を体験してみたかったから 15
- ・親子でできるから 16

この質問は回答がきれいに分かれました。いずれにしても前向きな参加動機と言えます。



制作を楽しむ子どもたち

Q参加前に期待していたものと実際に参加されて違いがありましたか？

・期待以上に面白かった

39

・大体期待した通りだった

8

・期待していたものとは違った

1

この質問からは、誘われたのはいいものの彫刻って難しいんじゃないの？というのが前提にあり、やってみると意外に楽しいものだった、と読めるのではないのでしょうか。

Q彫刻をつくってみて楽しかったことは何ですか？（自由記入）

「親子のふれあいができた。子どもが集中していた。」

「親子で作る楽しさを改めて感じた。」

「子どもの顔をまじまじ見る良い機会になりました。」

「はじめはのり気ではなかったですが、やりだしたら夢中になってきました。」

「子どもの創造力を垣間みることでできてよかった。」



子どものキラキラした表情が印象的でした

Qワークショップで実際に作ったあとに展覧会の作品をご覧になって感じ方が変わりましたか？

「今まで何気なく見ていた作品でしたが、視点が変わっていろんな工夫、チャレンジされている事など、また作品の美しさもより深く感じられるようになったようです。」

「顔の形だけでもむずかしいのに生きているみたいでした。」



みんなこだわって制作していました

その他、感謝の言葉が多数寄せられました。準備や声掛け等、いろんな苦労もありましたが、参加頂いた皆さんの笑顔が最大のご褒美のように感じます。

（北陸日彫会石川事務局）

アトリエ訪問Ⅰ

彫刻家同士が顔を合わせて話をする時、「どのようところで制作をしているのか」といった具合に、しばしばその話題はアトリエに向けられます。

彫刻制作の魔力に取り憑かれた彫刻家にとっては、その制作過程を満たしてくれるアトリエは欠かせないものです。彫刻芸術において、その制作活動はいわゆる3K（きつい、汚い、臭い）を許容してくれる空間を求めます。広くゆとりのある空間、コンクリートや丈夫な木材による堅牢な床、隣地に対して埃や音、有機溶剤等の臭いを気にせず活動できる立地は彫刻家にとっては至極贅沢な空間であり、理想的なアトリエとなります。

しかし、首都圏に近い場所で制作を行う多くの彫刻家にとって、アトリエとして適切な空間を得るために苦慮しているのが実情でしょう。だからこそ、アトリエは常に挙がる話題の一つであり続けるのではないのでしょうか。

10人の作家がいれば、10通りのアトリエがあるはずですが。苦勞も伴いながら、本会の会員も様々な工夫を行い、制作に向き合っています。

今号より新企画として、こうした点にスポットを当て、アトリエ訪問と言う形で紹介することになりました。第一回は、大作に臨む木彫家と新進の若手を取りあげ、そのアトリエを訪問しました。

◇ 親松英治会員のアトリエ訪問

神奈川県藤沢市の中心に近い地区に、周辺に密集した住宅街からは想像できない広大な森林があります。広さにして東京ドーム2個分に及ぶその豊かな自然を有するのは、カトリック修道院が運営する聖園女学院中・高等学校です。

この学院の敷地内、校舎から少し離れた一画に親松会員のアトリエがあります。中に入ると、爽やかな木の香りが漂い、いきなり目の前に圧巻の大きさの聖母子像が飛び込んできます。その空間は訪ねてきたものを非日常に誘い、天窓から差し込む光は聖母子像に荘厳さを加えています。

アトリエは延べ60坪ほどで、天井までは7.8m高さがあります。元々は高さ5mほどの学院の牛小屋でしたが、親松会員自らが一部の屋根を2m程伸ばす改築を行ったそうです。

高さ10mの聖母子像は、現在、作業効率と天井高から2分割して制作しています。およそ1m立方の樟を寄せ木して作り上げた木彫像となっています。大木の樟8本以上購入し、その材料費は家が一軒建てられるほどだということです。これほどの時間と労と費用を掛けた制作ながら、依頼を受けた仕事ではないという点にも驚かされます。日本のキリシタン殉教者のため、自分の好きな聖母子像を、生涯をかけて制作したいとの想いを制作の源としています。そして、1981年来日のヨハネパウロ2世教皇

の祝福を受けて制作が始まりました。構想から35年以上経ち、ようやく完成が近づいているそうです。



アトリエに置かれているマケット

会員の自宅のアトリエは、これだけの大作制作の空間がないため、片瀬海岸で別荘を借りて制作が始まりました。しかし、5年前に貸主の相続の問題から別荘が売却されることになり、立ち退きを余儀なくされました。途方に暮れた会員は修道院総長に相談したところ、無償で現在のアトリエを借りられることになったそうです。神頼みが叶ったと言うより、会員の徳からくるものだと思います。



上：制作中の聖母子像と親松会員



親松会員のアトリエにて

また、アトリエの屋根のかさ上げにみられるように、会員は木彫制作にも様々な工夫を凝らしていました。原型（石膏像）からの拡大方法も独特な手法ですが、最も驚かされたものは木彫制作ではやっかいな星取作業を機械化したことです。原型の星に合わせたポイントがチェーンソーや高速ルータにより同じポイントに彫ることができる機械の発明です。これによると1m以内の作品は1日で大まかな形が作られ、後は細部の彫刻と意識的な彫り跡を彫るだけで極端に制作時間の短縮ができるとのことでした。現在81歳、未だに衰えない彫刻に対する旺盛な意欲に只々驚かされました。

◇ 武本大志会員のアトリエ訪問

交通渋滞対策として左折帯が作られ、碁盤の目のように整然とした道路。未来都市を標榜して造られたつくば市の中心から北東の田園地帯に武本大志会員のアトリエがあります。平屋の建物は、たぶん当初は商店または事務所として作られたものと思われる風貌です。中に入ると、延べ面積15坪ほど一間の空間に、所狭しと幾つもの作りかけの作品が回転機の上にシートを被せて置かれていました。



アトリエに並ぶ制作途中の回転台

下：アトリエの壁面に掛けられる制作道具



武本会員は今年の第45回日彫展において日彫賞を受賞した新進の若手作家です。作品は乾漆による雷神を表現したものでした。兵庫県から絵画に興味があり画家を目指して筑波大学芸術専門学群に進学しましたが、在学中に彫刻に魅せられ、大学院修士課程、研究科、博士課程と11年間筑波に在学し、今年の春に卒業しました。それまでの制作場所は、学校の彫塑教室を使用していたのですが、郷里に戻る彫刻の先輩が使っていたアトリエを譲り受けたそうです。

アトリエの中の壁面には様々な工具を整然と配置され、小形制作や、アイデアを模索する空間を区切るなど、様々のところで効率的に制作



アトリエに立つ武本会員

ができるような工夫が施されていました。乾漆作品の制作は、在学中に日彫会会員の乾漆の仕事を手伝うことになり、強い興味を抱き始めたのが切っ掛けだそうです。乾漆技法は日本古来から伝わるものにも関わらず、様々な条件から現在その技法で制作する彫刻家は希少な存在になってきています。武本会員は乾漆技法に魅せられ、日本的な要素の作品を自分の感性で表現しようと試みています。

39回展より乾漆作品を出品し、40回展「輸入道」、41回展「河童」、42回展「こだま」、43回展「ろくろ首」、44回展「風神」、45回展が「雷神」と、新風となつて刺激を与えています。

東京彫刻散歩Ⅷ

《和氣清麻呂像》 ブロンズ

佐藤朝山（清蔵・玄々）

（よこつちょうざん 1888～1963）

設置場所 千代田区大手町二丁目4

大手濠緑地

東京には多くの彫像がありますが、その中で三大銅像は何かと問われれば、一般的には靖国神社の《大村益次郎像》、上野恩賜公園の《西郷隆盛像》、皇居外苑二条橋近くの《楠木正成像》が挙げられるところでしょう。

《大村益次郎像》は日本で初めての西洋式銅像であり、日本における近代彫刻の先駆者である大熊氏広が原型制作にあたり、明治26年（1893）に建立されました。一方《西郷隆盛像》《楠木正成像》は、伝統木彫を近代へと橋渡しした高村光雲が原型制作を務め、《西郷隆盛像》は明治31年（1898）に除幕、《楠木正成像》は明治33年（1900）に献納されました。

この三作が挙げられるのは単にその認知度の高さゆえからではなく、歴史的な側面から考えても妥当なものとなっています。いずれの作も日本近代における最初期に造られ、日本の銅製彫刻の原点に位置付けられるものです。そして、戦時期に制定された金属類回収令を乗り越え、

現代においてもその堂々たる像容を示しています。

今回の彫刻散歩で紹介する作品もまた金属類回収令を免れた貴重な銅像となります。近代を代表する木彫家、佐藤朝山作《和氣清麻呂像》です。

佐藤は明治21年（1888）福島県相馬郡（現相馬市）に生まれ、高村光雲の高弟であった山崎朝雲の元で木彫を学びました。内弟子として修行を積み、師から「朝」の字を授かり「朝山」と号した佐藤ですが、「清蔵」「玄々」と時代によつてその号を変えていったことで知られます。

そして、実は、「朝山」の号を捨て「清蔵」を名乗ることになったきっかけがこの《和氣清麻呂像》の制作に関わるのです。

和氣清麻呂は奈良時代末期から平安時代初期にかけて活躍した公卿であり、天皇家の正統な皇位継承を存続させた忠臣として知られる人物です。戦前は特に、楠木正成と並んで、天皇への忠誠心の象徴として顕彰されました。当時の拾円紙幣にはその肖像が描かれていたことから、当代の様子を窺い知ることができます。銅像は、和氣公精神の高揚のため、昭和15年、皇紀二千六百年記念事業として建立されました。



威風堂堂した姿で立つ《和氣清麻呂像》

《和気清麻呂像》の制作では、当時としてはめずらしい競作という形で原型制作者の選定が行われました。競作にあたっては、以前の彫刻散歩で紹介しました朝倉文夫、北村西望、それに佐藤朝山という気鋭の作家3人が候補として挙げられました。しかし、この原型制作者の選定に際して、佐藤は師である山崎から支持を得られなかったとして不和が生じてしまいます。

結局この競作を機に、佐藤は「朝山」の号を返上することとなりました。異例の競作の混乱もあり、昭和14年（1939）10月の競作の鑑査の前に朝倉は制作を辞退し、北村もこれに原型を提出せず、原型制作には佐藤が選任されました。

銅像の原型制作者に選ばれた後、いよいよ佐藤は実寸の原型制作に取り掛かります。忠臣和気公の造像にあたり、佐藤はアトリエに注連縄を張り気持を高め、1丈4尺の塑造原型を9ヶ月あまりの期間で完成させました。

人物の姿が写生される一般的な肖像彫刻に対して、佐藤の《和気清麻呂像》は造形的な個性があり、独特の量感を有しています。塑造による銅像原型の制作でしたが、粘土の柔らかさを生かした即興的な仕事ではありません。木彫家である佐藤らしく、執着を積み重ねた作であり、あたかも木彫原型であるかのごとく仕上げられました。当時の新聞の言葉を借りれば「木彫風」の表現となっており、体軀はどこか抽象的でもあり、貫禄ある立ち姿は外光の元でより一層悠々と見えます。

時代の情勢により金属の使用が厳しくされた当代において、関係各所が調整に努め、造像に際しては6t以上の銅材が用意されました。幸運にも金属徴収を逃れた《和気清麻呂像》は、戦争という混乱期を越え、現代にその時代を語り継いでいます。そして、今日も皇居から見て鬼門の方角を守護するように立っています。

〈散歩のご案内〉

～最寄駅～

- ・東京メトロ東西線
竹橋駅2番出口すぐ

これまでの東京彫刻散歩

東京彫刻散歩ではこれまで、都内8ヶ所の彫刻作品を紹介してきました。ここで一度振り返り、作品所在のまとめをしてみたいと思います。左図は、山手線を中心とした東京の地図で、紹介してきた彫刻作品の位置を☆印で示しています。番号ごとに、①ファッツィーニ、②ブルデル、③グレコ、④マイヨール、⑤ムーア、⑥北村西望、⑦朝倉文夫、⑧佐藤朝山の作品となります。散歩の参考となれば幸いです。



地図データ ©2015 Google ZENRIN

2015年日本彫刻会選抜展 —美の多様性を求めて—

平成27年6月10日（水）から16日（火）まで、日本橋三越本店6階美術特選画廊にて日彫会選抜展が行われました。

「三越展」の愛称で親しまれているこの企画は、平成2年、日彫展の第20回展を記念して企画され、以降隔年で行われてきました。

本年の、2015年日彫会選抜展は、「美の多様性を求めて」を副題として、40名の作家がそれぞれの試みを発表する場となりました。

会期中の13日（土）午後3時より、50名ほどの来場者の中、ギャラリートークが行われました。ギャラリートークでは、はじめに神戸峰男常務理事が自身の作品について話をされました。その後、指名を受けた出品者が自分の作品について解説を行い、話の後に次の解説者を指名するというリレー形式で進行していきました。

予定されていた時間は瞬く間に過ぎ、盛況のうちにはギャラリートークは終わりを迎えました。時間の都合上、11名の出品者が解説を行うに留まりましたが、一人ひとり違った角度からの彫刻に対する熱い思いや、作品の制作意図を解説しました。制作者本人による作品解説は、参加された一般の方のみならず同席した出品者にとっても刺激となるとも有意義なギャラリートークとなりました。

開催に関する詳細は左記の通りです。

会期 平成27年6月10日（水）～6月16日（火）

10時から19時まで

会場 日本橋三越本店本館6階美術特選画廊

東京都中央区日本橋室町1-4-1

出品者

中村晋也	山本眞輔	雨宮敬子
橋本堅太郎	川崎普照	蛭田二郎
能島征二	神戸峰男	圓鏝元規
久保田俣通	横山豊介	石黒光二
上田久利	江里敏明	亀谷政代司
九後 稔	寒河江淳二	佐藤敬助
柴田良貴	嶋畑 貢	清家 悟
田丸 稔	中原篤徳	西村祐一
早川高師	平戸司郎	堀龍太郎
堀内秀雄	堀尾秀樹	村井良樹
村山 哲	山崎茂樹	山田朝彦
上田ふみ	小関良太	小宮山美貴
一鍬田徹	前芝武史	宮坂慎司
吉岡 徹		

（順不同・敬称略・計40名）



選抜展 ギャラリートークの様子

編集後記

◆日彫会報第74号の発行に際しまして、ご協力いただきました先生方には大変お世話になりました。編集後記をかりまして御礼申し上げます。

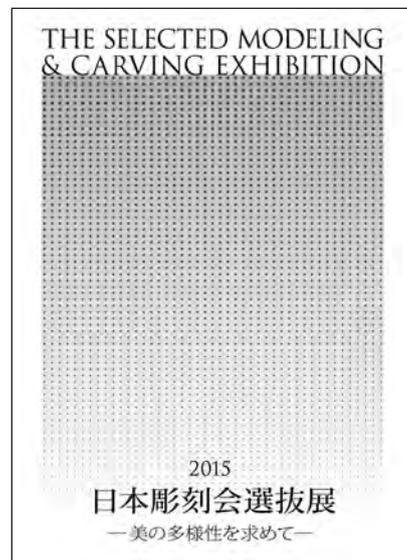
◆今回号より、新しい企画を立ち上げました。アトリエ訪問という形で会員の制作空間を紹介していきます。

◆アトリエ訪問について、会員の先生方におかれましては、企画にご協力をいただければ幸いです。アトリエの苦労や工夫など、自薦他薦を問わず、情報をお寄せください。

◆新しい企画等についてご意見などありましたら、今後とも是非編集委員にご意見をください。よろしくお願い致します。

編集委員 村井 良樹 上田 ふみ 長谷川倫子
一鍬田 徹 前芝 武史 宮坂 慎司

日彫会報 No.74 平成27年8月31日発行



2015 日本彫刻会選抜展 DM